

空 気・呼 吸・精 神

越 後 周 造

空気の気の字はもと象形文字から出ていて水蒸気が流れる形を示すとあるが、英語の air は Greek の *ἀήρ* より出ていて *ἄημι*, I blow, 又 *ἀήτης*, a blast, gale, wind, につながる。Skeat の Etymological Dictionary で wind n. の項を見ると air in motion, breath とあり、正に気の姿を示していることが知られる。換言すれば、この wind は $\sqrt{wē}$ を base とする present participle の形をとっていて blowing を意味している。更に Greek の *ἀήρ* は *ἄημι* から $\langle \bar{a}wēmi \rangle$ に遡る。 $\bar{a}wēmi$ の \bar{a} は prefix で、結局 wind と同じ base $\sqrt{wē}$, blow に帰着することになる。今少しこの語根を展開すると Lithuanian wejas, 'wind'; Gothic waian, OHG wajan, OE wāwan, 'to blow' となる。

$\sqrt{wē}$ は Sanskrit では va となり wind は vata-s である。涅槃 nirvāna は文字通りは nir (=out)-va (=blow) で、つまり blowing out a flame of lust を意味している。Russian では wind は veter で、Modern English の weather, O. E. の weder に対応し動詞 vejat', blow と関係している。又 German では無論 Wetter, 'weather'; Gewitter, 'storm' も類縁の語である。

Septuagint Version Greek & English Old Testament を開くと、その劈頭に次のように書かれている。'EN ἀρχῇ ἐποίησεν ὁ θεὸς τὸν οὐρανὸν καὶ τὴν γῆν. 'H δὲ γῆ ἦν ἀόρατος, Καὶ σκότος ἐπάνω τῆς ἀβύσσου. καὶ πνεῦμα θεοῦ ἐπεφέρετο ἐπάν τοῦ ὕδατος. これに対応する英文を見ると次のようになっている。In the beginning God made the heaven and the earth. But the earth was unsightly and unfurnished, and the darkness was over the deep, and the Spirit of God moved over the water. 冷厳な一瞬の情景である。しかも何か活気に充ち溢れた文章である。πνεῦμα θεοῦ は the Spirit of God に対応している。πνεῦμα は元来 wind, air, ついで breath を意味し、πνεῦμα βίου は the breath of life である。それがこの文脈では the Spirit of God の意に用いられていて、もっとも θεοῦ と云う限定がついているので、左程注目を強いる程の意味の飛躍がある訳ではない。しかしながら πνεῦμα 単独で又は ἅγιον πνεῦμα として三位一体の一つをなす the Holy Spirit を意味したことは Greek-English Lexicon の教えるところである。この一見長大な空気や 風に纏る 意味の展開 sense-development が本論の主題をなすのであるが、試みに「気」なる漢字について諸橋徹次著の大漢和辞典巻六を検索するならば、その意味の四元気万物生成の根元力、(㊦)宇宙の万有を生成する質料、を発見し、東西呼応する parallel な意味の発展を知る時、これが極めて natural な意味展開であることを理解するのである。この πνεῦμα も modern English に入ると、pneumatic dispatch, 郵便物などの圧搾空気伝送機や pneumatic tire, 空気入

りタイヤなど日常的な役割を果たしている。Greek では対応の動詞は *πνέω* で I to blow, breathe, of the wind. II to breathe, send forth an odour, exhale などの意義が lexicon によって与えられていることに注目して置きたい。

英対訳を通じて *πνεύμα* と spirit が引合いにだされる。spirit は元来 spiritus として Latin 起源の字であって Greek には現れない。Skeat の Etymotological Dictionary によると the soul, a ghost, enthusiasm, liveliness, spirituous liquor, などの訳語が与えられているが、この語の原義 breath では English で使用されていないことが注目される。Latin にまで遡ると a breathing, breath なる原義を始めとして a sigh, breeze, the air, fig. of a god, breath, inspiration, the breath of life, disposition, high spirit, energy, courage, haughtiness, pride, arrogance など豊饒な意味領域を持っている。French では esprit となり、English の spirit の持つ通常な意味に加えて、特にフランス文学の重要な理念をなしている才智、機智と云う意味を担い、かかるものとして English にも借用されている。Latin の spiritus に対応する動詞は spirare, to breathe であるが、この方は English に入ると、to breathe なる figurative meaning を含みながら, aspire, conspire, expire for exspire, inspire, perspire, respire, suspire, transpire などの多産な派生語群を造出している。次に animal, animate, animation を取扱うことにする。日本語でも生き物とはもと息きものから来たと云われているが、animal の場合にも原義は a breathing being で類似の意味の発達を辿ったと考えられる。これらの語は直接的には Latin の anima にまで遡るのである。これを Latin 語の辞書によって見ると、air, breath, wind, the fumes of wine, life, a living being, departed spirits, the rational mind, などの意義を見出すことが出来る。Latin には尚 anima の類縁の語として animus があり、これはそのままの形で English にも借入されており、a feeling of animosity の意味をもっている。Latin では animus は頗る多義であり、辞書によると the rational soul, intelligence, mind, consciousness, self-possession, the conscience, opinion, judgment, belief, imagination, feeling, inclination, temper, courage, arrogance, pride, passion, 等に亘っている。

Greek で同根の語には *ἄνεμος*, wind がある。anemone は wind-flower と称し、風媒花 (= anemophilous flower) である 故にその名があるのである。これらの語の base は $\sqrt{\text{an}}$ であり、Sanskrit で to breathe, to live を意味する。これは広く印欧語に分布し、Gothic, us-anan, to breathe out, to expire, Icelandic anda, to breathe, önd, breath となる。序ながら Latin の animus は English で豊饒な derivatives をもっている。即ち animadvert (もと turn the mind to の意から pass censure on の意となる) unanimous, equanimity, magnanimous, pusillanimous, 等である。animal と関連して、Onions の Oxford Dictionary of English Etymology について、beast の項の末尾から引用すると、Beast displaced deer and was itself displaced by animal in the general sense, but is retained in dialect and technical use in special phrase ; as 'man and beast' 'wild beast' and fig. とある。多少とも解説的な説明を加えることにすると、deer は OE で dēor, OHG tior (G tier), ON dýr, Gothic dius (in dative plural diuzam) : Common

Germanic *deuzam* ; —IE *dheusom any breathing creature*) となっており, ‘息きもの’ からその原義 *any wild beast* であったが, 後から English に入った *beast* (ME *beste*) に代置されて, *deer* は原義を失い 意味変化を起して 鹿と云う意味で 現在まで 命脈をつないでいる。現に Dutch *dier*, German *Tier* は, *animal*, *beast* の原義を保持しつつ, 現在に及んでいる。ところが *beast* も同様な運命を辿り新参の *animal* に排除されて, 僅かに方言や 特殊な慣用句 *man and beast* や *a wild beast* に余命をつないでいる状態である。Wyld によると *beast* と云う語は Aryan 系の **dhwēdhia* なる *base* にまで遡る。そこから先づ **dwēsdia* となり, ついで Latin の原形 *bēstia* が生れた。けだし *dw-* から *b* への推移は Latin では正常な変化とされている。元来 **dhēwes*, **dhwēs*, *dhūs* 等色々な形態をとって現れる *base* は *to breathe* を意味し, the Indo-European Family 特に Balto-Slavic 系に広く分布している。すなわち Lithuanian *dvēsti*, *pant dūsti*, *sigh dvāse*, *breath*, *spirit* ; Lettish, *dwēs-ele*, *breath*, *soul*, *life* ; Old Slavonic *dychati*, *breathe*, *duchū*, *breath*, *dusa*, *breath*, *soul* ; 更に Sanskrit に遡ると *dhūma*, *smoke*, *steam*, $\sqrt{\text{dhū}}$ (試みに榑博士がこの *base* に与えておられる訳語を記すと, 払う, 吹く, 揺落ち, 煽揚す, とある。例えば煽揚すと云うのは, この *base* の含む重要な概念を云い当てていると思うのである。何かを煽(あふ)り立てて, 雲のように捲き上げたり, 火の粉を真赤に燃え上らせると云った *nuance* がこの語幹に含まれていると考えられる。Onions の Oxford 英語語原字書について, 同系の英語の *dust* n. の項を見ると The primary notion appears to be ‘that which rises in a cloud, as dusk, smoke, vapour ; とあるのはこの意味である。この *dust* は OE. では *dūst* で, OHG *tun(i)st* (G. *Dunst*) の *n* の脱落によって所謂代償延長 (compensative lengthening) したものである。類例では *ōther for anther*, *tōth for tanth* である。鋭敏な言語感覚を持っておられた 佐藤通次氏の独和言林を見ると *Dunst* (塵のように細かに空中に散る) 蒸気, 湯気, 霞, 霧, 霏とある。尚この語には臭気, においの意味がある。諸橋轡次氏の大漢和辞典の ‘気’ の項(十)には, にほひ, かをり, とあるのを参考にすべきであると思う。ただ English の *dust* は塵, ほこりと云う意味だがこれが *Dunst* には現実には見られないことが注意されることである。今一度 Sanskrit の $\sqrt{\text{dhū}}$, *dhuma* に戻りもう少し展開すると, Greek *θῆμος* (心, 怒り), Latin *fūmus*, Old Church Slavonic or Slavonic (スラヴ語の文語発達史上重要な役割を果たすと見られる) *dymū*, middle Iranian, *dumach(ū)* (煙, 蒸気) (cf. 高津春繁著: 印欧語比較文法, 66頁) と云った具合である。これらと先に引用した Balto-Slavic の諸語に分布する類縁の語彙とを比較照応することによって, 例えば Russian の類縁の語の起原を推定することが出来るのである。即ち *dym*, *smoke* ; *dyxanie*, *breath*; *dyshat’*, *breathe* ; *dut’*, *to blow of the wind*, ex. : *Duet sil’ny. veter.* (=It is blowing a strong wind) しかし中心をなす語彙は *dux* (pl. *dusce*) と *dusha* である。このうち Latin の *anima* に当るのが *dux* であり, Latin の *animus* に当るのが *dusha* である。Latin の両語の場合同様, Russian の両語も極めて多義である。即ち *dux* の項には①精神, ②生氣, ③気分, ④本性, ⑤靈魂, ⑥魔, ⑦呼吸, 氣息, ⑧空気, 蒸気, ⑨香, ⑩噂, ⑪幽霊, ⑫ (svyatoi *dux*=holy spirit) 聖霊, ⑬ざんげ, plural の *dux* は香水と云う意味を加える。またもう一方の *dusha* は①靈魂,

②気質, ③本質, ④智, 理性, ⑤情愛, ⑥中心人物, ⑦愛する者への呼掛, ⑧人等の意味を列ねている。今かりに *anima* に由来する English の派生語に *dusha* を主体とする Russian derivatives の対応を試みるならば *unanimous* : *edinodushnyū* ; *magnanimous* : *velikodushnyi* ; *pusillanimous* : *malodushnyi* ; *equanimity* : *ravnodushie* となるのである。続いて Greek の *θυμός*, *anger*, *spirit* は Greek 自体では *εὐθυμός*, *well-disposed*, *generous* ; *πρόθυμός*, *ready*, *willing* のようであり, これは English には *thyme* [taim] として入っている。早く French から入った為に *h* が *silent* になっている。これはタチジャコウソウと云う *a fragrant plant* の故にこの名があるのである。Latin の *fūmus*, *smoke* ; より出た *perfume*, 香水を参考にすべきであろう。Latin の *fūmus* はまた English に入って *perfume* の外 *fume*, ① *vapor*, *smoke*, ② *a strong odor* ; *fumigate*, *expose to smoke* などを派生する。

次に A. C. Wyld の *The Universal English Dictionary* について, *atmosphere* の項を検索すると次のように出ている。: fr. Gk *atmós*, 'smoke, vapour' *sphraira*, 'ball, sphere'. Skeat も Onions もこのことに関して Ck. *atmós*, *vapour* 以上には触れていない。只 Wyld のみが *either or* として Gk *āēmi* か Scrt *ātmā* & OE *æthm* かとの同意語関係を打ち出している。この点に関し決然と踏切ったのは *The Random House Dictionary of the English Language* である。その *atmo-* の項を見ると *learned borrowing from Greek meaning 'air' used in the formation of compound words* : *atmosphere*. 更に語原の欄には [(GK *atmós*) *vapor*, *smoke* ; c Skt *ātman* *breath*, *soul*, OE. *æthm* *breath*] とある。続いて同辞典について *atman* n. の項を見ると *Hinduism* 1. the breath. 2. the principle of life. 3. the individual self, known after enlightenment to be identical with Brahman. 4. (cap.) the world soul, from which all individual souls derive, and to which they return as the supreme goal of existence. 殆んど間然するところがない。尚補足的に中村元著インド思想史から引用し, 又必要に応じて辞書的説明を加えて行くことにしたい。

‘来世観を見るに, 肉体は死とともに滅びるが, 靈魂は不滅であると考えた。靈魂の觀念は心, 呼吸を意味する語 (*manas*, *prana*, *ātman*, *asu* 等) によって言い表わされた’ (cf. 13頁) 又 ‘呼吸 (*prana*) は宇宙の生氣, 万有の支持者として, 大宇宙の最高原理たるのみならず, 個人の主体と目せられた’。(cf. 19頁) 更に続いて ‘ブラフマンが中性的原理であるに対して, アートマンはむしろ人格的原理である。アートマン (*ātman*) とは元来「氣息」を意味する語であったが, 転じて「生氣」「身体」さらに「自身」の意味になり, 哲学的概念としては「自我」「自己」「靈魂」さらに「本体」「万物に内在する靈妙な力」を意味する術語とされた。そうしてアートマンからの世界創造が説かれるとともに, アートマンを認識すべしということが繰返し強調されている。(cf. 26頁) 念のため, Sir Mr. M. Williams の *A Sanskrit-English Dictionary* によって, 中村博士の言及された *manas* を検索すると, *manas* : *mind* (in its widest sense as applied to all the mental powers), the spirit or spiritual principle, the breath or living soul which escapes from the body at death (called *asu* in animals ;) とある。すなわち人間が死ぬとき肉体を離れ

る生命乃至息吹を **manas** と呼び、動物の場合は **asu** と呼んで区別するのである。序でながら **prana** は <pra+an+a で先に **animal** のところで言及した **base √an, to breathe** と関係があることは言うまでもない。

以上われわれは漢字の‘気’の持つ色々な意味と対照しながら印欧系の諸語の元来息き、呼吸する空気を原義とするものについて、それらの意義の変遷や推移を跡づけて来た。われわれ人類——いや、地球上に生息するすべての生物は地球を包んでいる空気の層——所謂‘大気’圈(**atmosphere**)の中で生きている。水蒸気、湯気、霧、霞、霏、そして雲また香等が風に送られて動くさまはわれわれが親しんでいる身近な空気中の現象である。ところがそれに止らない。その空気を命ある限りわれわれは四六時呼吸して生きている。空気の汚染がなくとも、われわれの生は空気の状態によって直接に影響を受ける。感情が激するとき呼吸は急迫し、悲嘆に沈むとき呼吸は沈静し長大息をもらす。悲痛が極まるとわれわれは遂に絶句する。つまりわれわれの呼吸は少時停止する。われわれの精神はわれわれの呼吸に反映し、その生命はその呼吸する空気に直接につながっている。このような例えば漢字‘気’の持つ基本構造の中に、‘気’が展開した意味系列の素因を含んでいたと考えることが出来ないだろうか。単なる意味素(**sememe**)というような単一な概念では到底捕え難い巨大な構造ではなからうか。

古来禅家は整身端坐して呼吸を調えて、禅定(**Dhyana**)に達せんとする。つまり樹下石上において成道された釈尊の姿を目標とするもので、換言すれば先に引用した中村元博士の言葉を借りるとすれば、彼等はアトマン(**ātman=individual or world soul**)を認識せんとしているのである。それが案外身近な **atmen (=breathe)** German につながって行くことをわれわれは想起する必要がある。

(著者 一般教養 昭和49年2月25日受理)

参 考 文 献

榊亮三郎：梵語学 種智院大学出版部 昭和33年

高津春繁：印欧比較文法（岩波全書）

中村 元：インド古代史（岩波全書） 1957年

Septuagint Greek-English Old Testament Bagster

辞 書 類

H. C. Wyld: The Universal English Dictionary Routledge & Kegan Paul 1957.

W. W. Skeat: An Etymological Dictionary of The English Language Orford Univrsity Press 1963

C. T. Onions: The Oxford Dictionary of English Etymohogy Oxford The Clarendon Press 1966

市河三喜: Dictionary of English Philology 研究社 昭和15年

Liddell and Scott: Greek-English Lexicon Oxford The Clarendon Press 1963

C. T. Lewis: An Elementary Latin Dictionary Oxford The Clarendon Press 1953

Friedrich Kluge: Etymologisches Wörterbuch der Deutschen Sprache Walter de Gruyter 1967

多屋頼俊：仏教学辞典 法蔵館 昭和45年

佐藤通次：独和言林 白水社 昭和11年

Sir M. M. Williams: A Sanskrit-English Dictionary Oxford the Clarendon Press 1899

諸橋徹次：大漢和辞典 卷六 大修館 昭和42年

Jess Stein: The Random House Dicitonary of the English Language 1970

(Editor in chief)